週刊ダイヤモンド　今週の一冊

北村行伸

平成 16 年 3 月 13 日号

「負け犬の遠吠え」

酒井順子 ㈜
講談社　2003年10月27日刊

現代社会の中で起こっている最も劇的な変化はおそらく人口成長率の急速な落ち込みということであろう。日本ではこの数年内に総人口が減少を始めると見られている。この背後にあるのが、若い世代の未婚化であり晩婚化であり、その結果としての少子化である。

晩婚化の実態として、現在の30歳の女性の50％は未婚であり、彼女らが50歳になっても20％は結婚していないであろうという予測がある。男性の未婚率はそれよりも高いので、この世代は歴史的に未曾有の未婚世代となると考えられている。

本書は、その世代に属する著者が、30歳代以上で独身、子ナシの女性たちを「負け犬」と呼び、彼女らがなぜ結婚しないのか、何を考えて日々を過ごしているのかを赤裸々に語ったユーモアあふれるエッセイ集である。

著者によれば、「日本に住む雌雄の負け犬達は、結婚をしないで子供を産み育てているわけでもなければ、結婚をしない方が良いという確固たる信念を持っているわけではありません。オスもメスも、異性に求めるものがあまりにも違うせいで、“ 結婚したい相手もいないし、しないでいるか ” 程度の気持ちで、ただ漫然と歳をとっていくだけなのです。子供を欲する気持ちは持っていても、結婚をせずに子供を産み育てる土壌は日本には存在しないので、子供の数も減るばかり」ということである。

この世代はバブル崩壊後、社会学者によってパラサイトシングル世代と呼ばれ、批判的に描かれていたが、著者は洒脱な文章によって、かなりきわどい発言を続けながら、負け犬の生き方を説得することに成功している。その力量には脱帽せざるを得ない。

彼女らは各方面で重要な仕事をこなし、茶道、古典芸能、バレエ、フラメンコ、オペラ、映画などの文化的活動を支え、高級ブランド品をおしげもなく購入し、海外旅行や高級レストランでの消費を支えている。まさにバブルに咲いた高嶺の花よろしく、日本では際だって洗練された（並の男ではついていけない）世代であり、経済的にも多大な貢献をしている世代なのである。

現在の社会的価値観は、従来の「結婚して子供を生むことが女の幸せ」というものから、著者の次のような考え方にシフトしてきているのだと思う。すなわち、「ここまで負け犬という単語を連呼してみると、勝ちだの負けだのということが、ほとほとどうでもいいことのように思えてくるのです。読者の皆様にも、そのどうでもいい感じが少しでも伝われば、幸いです。また負け犬の皆さんには「あなただけじゃない」ということを、そして勝ち犬の皆さんには「世の中には色々な人がいる」ということもご理解いただければ、筆者としても負

け犬になった甲斐があったというものです。」
　評者は本書を読んで、彼女らを無理して結婚させ出産させるような政策は機能しないし、彼女らの特性を生かすことにはならないと確信した。むしろ彼女らを含めて様々な多様性を受け入れるように社会を変えていくことこそが必要であると考えるようになった。だまされたと思ってぜひ御一読を。